

「展示解説の紙芝居を作るー博物館の低年齢向き学習資料の開発」 実施報告書

大阪市立自然史博物館

教育スタッフ 釋 知恵子

はじめに

大阪市立自然史博物館では、さまざまな学校連携事業を行っている。学校からのリクエストを受けたオーダー授業、職場体験の受け入れ、教員研修、ワークシートの提供、そして、書籍・ビデオ・標本などの貸し出し資料の提供などである。このような学校連携事業については、主に、博物館に遠足の下見に来られた先生に紹介し、利用をすすめている。しかし、低年齢を意識した学校向けプログラムはあまりなく、既存のプログラムでは難しいと言われ、利用されないことが多かった。他の博物館でも、文字のまだ読めない幼児など低年齢を意識したプログラムを提供しているところはあまり見ない。そこで、大阪市立自然史博物館のランドマークであるナガスクジラの解説を、小学校低学年・幼稚園・保育所など低年齢向き資料として、低年齢の子どもたちになじみが深く、利用されることの多い「絵本や紙芝居」といった媒体で作成し、低年齢向け学校プログラムを充実させることにした。また、この事業では、低年齢の子どもたちにとって、展示物が持つ情報＝物語がどのように理解されるのか、作成した資料によってどのように理解が深まるのかを調べ、低年齢向きのプログラムとしての紙芝居の可能性を探ることにした。

紙芝居の主人公としては、ナガスクジラの標本「ナガスケ」を選んだ。理由としては、以下の2点がある。①子どもたちと博物館の出会いの場に位置する：ナガスケは大阪市立自然史博物館の玄関前ポーチに位置しており、遠方からも見える博物館のランドマーク的な役割を果たしている。来館する子どもたちにとっては初めて出会う博物館の標本であり、学校団体はこの下で博物館に入る前に整列し、博物館に関する話や館内での注意事項を聞いて博物館に入る準備をするため、ナガスケの下で過ごす時間がある。また、開けた場所であるため、この下での読み聞かせも可能である。②紙芝居のベースがあった：展示解説として作成したミニガイド『ナガスケ』絵本（中原まみ，2010）があり、これをベースにして紙芝居を作成することが可能であった。

事業の進行

この事業では、企画・作成・試行を繰り返し行うことで、学校向けプログラムとしての資料の質を高め、使用する側の要望に沿った資料作りになるように進行した。

①大型絵本・紙芝居の試行版を用意し、どちらにするか考える。

当初、ミニガイド『ナガスケ』絵本を大人数で読み聞かせるために A3 サイズの大型絵本として拡大することを考えていたが、低年齢向けに使われているものとしては、紙芝居もあることから、どちらがいいのか両方試行版を用意し、現場の先生の意見や、読み聞かせ（平成 22 年 10 月 17 日）を行うことで決めることにした。

先生の意見：絵本・紙芝居どちらであっても、授業や保育でよく使うものであるため、どちらでもいい、ただし、絵本は先生と絵本と子ども、3者の関係があり情緒的に伝えられ、紙芝居は紙芝居と直接関係ができてお話の世界にしっかり入ることができるという意見が聞かれた。

読み聞かせの様子：絵本・紙芝居どちらもしっかり聞いており、子どもたちへのアンケートでも、紙芝居・絵本両方で、「とても楽しかった」「楽しかった」という声が多く聞かれ、媒体による理解の差はないように感じられた。読み聞かせを実施した感想としては、スムーズに聞かせられるのは紙芝居であるが、絵本ではめくったり、ページを渡って文章を目で追ったりする間がちょうどよく感じられ、子どもたちへ語りかける読み方ができるように思った。場の雰囲気を作り、情緒を感じさせられるのは絵本、ノンフィクションを伝えるという意味では紙芝居、という特長が感じられた。

以上のような結果を受け、紙芝居にすることに決定した。紙芝居、絵本それぞれの特長があったが、紙芝居を選んだ大きな理由は、①紙芝居では、文字面に物語の文章以外に使用方法や、先生向けのクジラの情報を入れることができ、先生へのメッセージを伝えやすい、②館内での大型プリンターを使って作成することにしてはいたが、絵本のように製本する必要がないので、紙芝居が傷んできたときのメンテナンスや差し替えが容易であるという形体としての大きな特長があったからである。

②紙芝居の改良

10月17日の読み聞かせでは、文章や絵の見直しも同時に行った。読みにくいところ、聞いて理解しにくいところがないか、近くや遠く、さまざまな位置から見ても分かりやすい絵になっているのか、場面によって写真がいいのか、絵がいいのかなどをチェックし、以降の改良に反映させた。特に、写真の扱いについては、クジラの体の様子や作業など読み取れる要素が多いので、なるべく大きな扱いになるよう工夫した。また、文字面については、市販の紙芝居を参考にし、紙芝居の使用方法、クジラの長さや重さを小学校1年生と比較して解説、豆知識として紙芝居で紹介したクジラ写真の解説文などを入れ、先生が利用するときの参考になるように工夫した。

③貸し出し資料の作成

少部数であるため、印刷所などへ外注せずに、館内での作成を基本とした。貸し出し

資料として A3 サイズを作成したほか、大人数への読み聞かせも対応できるように、A1 サイズの紙芝居、プロジェクターで投影できるようにパワーポイントのデータも作成した。貸し出し用資料は、必要なものを持ち運びしやすい書類ケースに入れてセットとして作成した。

<作成したもの>

- ・ 紙芝居 (A3 サイズ) : 学校向け貸し出し用 専用ケースに入れて貸し出し
- ・ ナガスケの原寸胸びれ型 (布に印刷) : 貸し出し資料のセットにする。
- ・ 博士からの手紙 : 博物館の学芸員から子どもたちへのメッセージとして、貸し出し資料にセットする。
- ・ 紙芝居 (A1 サイズ) : 博物館において、より多くの人数に対して読み聞かせで使用する。
- ・ 紙芝居パワーポイントデータ (CD-ROM) : プロジェクターで投影。ナレーションあり、ナレーションなしの二つのデータを作成。
- ・ 紙芝居舞台 (A1 サイズ)
- ・ 拍子木



貸し出し用「紙芝居セット」



原寸大のナガスケの胸びれ (布に印刷)



紙芝居のデータ版 CD-ROM (プロジェクターで投影可能)

④ 学校団体への読み聞かせ・貸し出し、一般来館者への読み聞かせ

小学校団体への読み聞かせ

平成23年2月1日、小学校2年生（75名）への読み聞かせを、博物館玄関前のナガスケの下で行った。紙芝居の最後まで、静かに集中して聞いており、ナガスケの身長と体重を紹介するところでは、人間の子どものサイズに置き換えて話すと、驚きの声があがり、ホネの写真が出てくると、頭上のナガスケの実際のホネを見上げる様子が見られた。また、読み聞かせが終わった



原寸大の胸びれを紙芝居の前に見せる

後には、先生と一緒にクジラのホネを見上げ、子どもたちと物語を振り返って話をする様子も見られた。

学校団体への貸し出しとアンケート・聞き取り調査

遠足の下見に来られた先生に、紙芝居を宣伝し、貸し出しを行ってアンケートや聞き取り調査を実施した。資料を貸し出した学校で行われる読み聞かせの見学を希望していたが、保育や授業の空き時間を利用しての読み聞かせであるため、予定が立てにくいという返事があり、実施は叶わず、アンケートでの調査となった。

アンケートは、小学校1校・保育所3園から回答が得られた。概ね反応はよく、以下のような感想が寄せられた。

- ・ 「クジラの大きさや、骨にするために埋めたところなど驚いたようだ。博物館の見学の前に紙芝居を見せたことで、興味・関心をもって見学することができた」（小学校3年生）
- ・ 「もう一度見たいといった子たちには、ミニ絵本（紙芝居と一緒に貸し出したミニガイド『ナガスケ』）を貸しました」（保育所）
- ・ 「話の内容に対して入りこんでよく見ていた。そして遠足で見るのを楽しみにしていて、遠足当日、これがあのお話のナガスケだと感動していた」（保育所）

貸し出しを行った小学校や保育所が遠足当日、どのようにナガスクジラと対面するのか、様子を観察した。普段は、恐竜とよく間違えられるナガスクジラの骨格標本だが、貸し出しを行った学校団体が来館するときは、遠くから「ナガスケだ!」「クジラだ」という声が聞こえてきたり、立ち止まってナガスケを見上げたり、子どもたちで話をしたりしていた。

一般来館者への読み聞かせ

博物館の無料入館日であった平成 23 年 3 月 20 日に読み聞かせを行った。たくさんの来館が予想されたので、A1 サイズの大型紙芝居を使用することにした。また、普段は収蔵庫にあるナガスクジラのクジラヒゲの標本を特別に出してきて見せ、紙芝居を使うワークショッププログラムとして実施した。

当日は、無料入館日とあって、家族連れで博物館に初めてやってきたという来館者も多く、大人を含め 444 名（このうち子ども 264 名）の参加があった。子どもたちの中でも、低年齢の子どもたちが多かったが、低年齢の子どもたちから大人まで、すべての年齢の来館者が一緒に紙芝居を聞く様子が見られた。途中、「土に埋めるのはなぜ？」という問いかけに、「お肉がなくなって骨だけになる」など、予想する様子も見られた。

実施に際しては、子どもたちの座る位置と声の届き方の関係や、紙芝居のめくり方、紙芝居の読み聞かせ前後の展開の仕方など、紙芝居の使用方法を検討・発展させることができた。



紙芝居を見つめる子どもたち



紙芝居の最後にクジラヒゲを見せる

事業の評価と考察、そして今後の展開

展示物が持つ物語を展示パネルだけによって読み取ることは低年齢の子どもだけでなく、大人にとっても難しいことである。今回の紙芝居は、この展示物の物語を丁寧に語ることにより、低年齢の子どもたちにも理解しやすくしようと作成した。紙芝居の効果としては、博物館での読み聞かせの最中や後に、子どもたちが「ナガスケ」を見上げる様子が見られたところに現れているのではないかと思う。これは、子どもたちの中で物語のナガスケと実際の標本がつながった瞬間であり、博物館の大切な資料である標本が、子どもたちにとって、特別な存在として映った瞬間であるのではないのだろうか。

下見のときには、普段貸し出し資料があることを伝えても、「難しそうだから」という理由で貸し出し希望がほとんどなかった保育所の先生も、「おもしろそう」とすぐに借りても

らえることが多かった。使用する側が使ってみたい、使いやすそうと思えるという意味で、紙芝居が持つ「親しみやすさ」は、低年齢向けの資料として、大きな力であると思われる。また、実際貸し出しを行った際の子どもたちの様子を見た先生の意見が好評だったことは、今回の取り組みが成果をあげられたという証しではないだろうか。

今回は、作成段階の読み聞かせの実施、学校への貸し出しやアンケート調査、そして、再び読み聞かせの実施という試行と改良の繰り返しにより、内容やハード面を練ることができた面も、評価できるだろう。

博物館のナガスケの下での読み聞かせでは、3歳ぐらいの子どもたちもしっかり聞いている様子が見られ、紙芝居の途中で問いかけをした場合、自分の言葉で物語を予想するなど、お話を理解している様子が見えた。対して、保育所での読み聞かせのアンケートの中には、「内容が少し難しかった（5歳児）」という意見があった。博物館のナガスケの下で読み聞かせるのではなく、博物館とは別の場所で博物館にクジラがいるということを想像しての紙芝居を見ることは、幼児にとっては、理解が難しい面もある。読み聞かせを自分で実施したことにより、子どもたちへの伝え方、資料の出し方などを実施側として蓄積することができた。紙芝居の貸し出しを行うときには、対面で貸し出せることを利点として、先生へ実施例を伝えたり、資料の効果的な使い方を伝えたりすることによって、よりよい学校での使用方法を引き出したい。また、先生から、他の紙芝居に対する要望の声が聞かれたので、機会があれば、2作目以降も作成したいと思っている。

この紙芝居は、財団法人科学博物館後援会の平成22年度「全国科学系博物館活動等助成」を受けて作成し、調査を行った。また、この紙芝居の作成に際し、ミニガイド『ナガスケ』と今回の紙芝居の著者である小島まみ（中原まみ）氏、当館学芸員の樽野博幸氏、佐久間大輔氏、大阪市立苅田北小学校、堺市立御池台小学校、大阪市立田辺東保育所、大阪市立鷹合保育所、ひまわり保育園の皆様、読み聞かせ実施スタッフ、当館のほかのスタッフに協力いただいた。お礼申し上げます。

文献

中原まみ. 2010. 大阪市立自然史博物館ミニガイド No.23「ナガスケ」32pp. 大阪市立自然史博物館.